

## 『学会開催報告』

## 第31回日本産婦人科手術学会

金沢大学医薬保健研究域医学系 産科婦人科学

大会長 井上正樹

第31回日本産婦人科手術学会が平成20年11月24日、石川県立音楽堂で開催されました。

かつては、産婦人科領域の手術、特に子宮頸部癌の手術は、権威者の特権のように扱われ、各大学がその術式を競い、流派を形成することがとき状況でしたが、今日では多くの若い人達がそれぞれ創意工夫を凝らし手術に挑んでいます。手術はまさに中世の宗教的束縛から解放されたルネサンス時代にあると言えます。その思いを第31回大会のポスターにしました。ミケランジェロの「アダムの創造」の一部です。

手術術式が標準化され新しい機器の導入により治療成績が手術者個人の力量で左右されることが少なくなってきました。かつては手術以外頼るすべはありませんでしたが、現在では放射線治療や抗がん化学療法が開発され、これらの併用が手術単独治療以上の治療成績を上げるに及んで、現在は如何に機能を温存しながら治療成績を上げるかが求められています。癌患者での妊孕性温存手術、QOLに配慮した手術、微小侵襲性手術、機能温存及び再建手術などの社会的要求が増えています。

金沢での大会には、高齢社会に突入した我が国に必要性が増すであろう「骨盤底筋群の老化による機能障害に対する手術的アプローチ」をメインテーマとして企画しました。予想を超える500人に迫る参加者がありました。

前夜祭として、イブニング・セミナー「手術の達人に習う」をホテル金沢で開催しました。最大200人の予想が450人の参加となり会場は超満員となり椅子を入れることで何とか着席可能な状態になりました。軽食の寿司弁当を用意していたのですが勿論足らず、会長挨拶で「医局員が金沢市内の寿司屋を廻って集めています」と思わず口走ったことで、逆に金沢大学産婦人科の結束力を評価していただくことになりました。

セミナー講演は京都大学名誉教授、京都医療センター院長、藤井信吾先生の基調講演「産婦人科手術でこころがけていること」で始まり1) 矢吹朗彦先生(北陸中央)、「基靭帯の定義と切除」2) 安藤正明先生(倉敷成人病センター)「腹腔鏡による広汎子宮全摘」3) 藤井多久磨先生(慶應義塾大)「腹式広汎性子宮頸部摘出術」4) 平松祐司先生(岡山大)「産婦人科手術における合併症軽減のための工夫」5) 長田尚夫先生(日本大学)「重症子宮腺筋症に行う子宮腺筋症摘出術」の演者で行われました。それぞれが手術の名手であり卓越した技量が主としてDVDで報告された。特筆すべきは子宮頸部癌の妊孕性温存手術後に新生児を得た症例が数例報告された事であろう。将来は一般手術として認知されてゆくであろう。

一般演題は56題集まりDVDの動画によるプレゼンテーションが目立った。その多くは新しい手術器具の使用や手技の改良・工夫であり、産婦人科領域の手術に絶え間ない進歩が感じられた。動画の発表が多く学会の発表形式にも変化の予兆を感じた。

特別講演Ⅰは千葉敏雄先生(国立生育医療センター)より「胎児外科治療の手術手技とその課題」が、特別講演Ⅱは渡辺剛(金沢大学・心肺総合外科)より「最新の心臓手術」が行われた。千葉先生は我が国の胎児治療の先駆者であり、fetus as a patientの言葉が印象に残った。渡辺先生はOf-Pump手術の先駆者であり我が国屈指の心臓血管外科医である。しばしば、テレビで神の手を持つ医者として登場されている。両先生に接し、新しい時代の扉を開く人は何か特別なオーラを感じることを再認識した。

クリニカル・ワークショップは「骨盤底からのアプローチ」と題して演題公募したところ一つでは納まり切らずに二つにした経緯がある。ワークショップⅠでは婦人科腫瘍の膣からのアプローチを積極的に進めようとの主張である。美容上からも術後の回復からも優れたアプローチであるが、リスクが無いわけではない。それぞれの演者が改良点や手技の工夫を発表され感銘をうけた。金沢大学産婦人科の田中講師は若い女性に多い卵巣嚢腫を安全に膣式に摘出する工夫を発表した。腹壁に傷を作らず安全に摘出出来ることから将来の標準術式になるであろう。ワークショップⅡは性器脱や尿失禁にたいするメッシュを使用した新しい手術法に関する報告であった。従来法との比較と新しい手技の光と影の部分について真摯な議論が交わされた。4時間30分に及ぶ長時間のクリニカル・ワークショップであった。我が国も高齢化社会を迎え、骨盤底筋群の老化・萎縮による様々な障害に対しての手術的な治療の開発は益々活発になるであろうとの私の予測は再確認された。多くの参加者が閉会の午後6時30分まで熱気溢れる討論がなされ、主催者である我々も大変な感動を覚えた。

技術は元来個人から個人へ伝承されるものですが、時代により科学技術に進歩の連鎖が生じます。大会を通じて多くの技術を学び、技を競い合い、技の連鎖を引き起こし、苦しむ患者さんの役に立てよう共に頑張ろうと再確認しました。

技術は元来個人から個人へ伝承されるものですが、時代により科学技術に進歩の連鎖が生じます。大会を通じて多くの技術を学び、技を競い合い、技の連鎖を引き起こし、苦しむ患者さんの役に立てよう共に頑張ろうと再確認しました。

